

---

# 死神

空暗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神

### 【Nコード】

N3917D

### 【作者名】

空暗

### 【あらすじ】

死神、それは大罪を犯した者の行き着く場所

## 【外伝番】 記憶と繋がり

「ヴィル、任務だつて」

後ろからのんびりした低い声で言われ、何だよと振り向く、もう誰だかは知っているが

すぐに白っぽい青色の髪が目に入り、やっぱりなと溜息をつく

驚くほど整った顔立ちの男、簡単に言えばそんな感じだ

少し青っぽい白い髪に真っ赤な目が二つ、まだ若干二十歳と思われるこの男は、この世界でもトップの実力を誇る実力者だ。

そして、俺の現在の師匠でもある

こんな綺麗な見掛けして、中身はどうかと覗いてみれば真っ黒焦げだそれでもギャーキヤーと黄色い声を上げられるのは流石にむかつくものがある

「何？誰から？」

師匠に対する態度とは思いがたい態度での応対だがこの俺の質問に満足そうに微笑むだけで、注意もしない、この男はちっとも気にしない、いや、気にならないらしい

「神様からだよ、任務内容は神殿に来てから伝えるだつて」

なんだと神様だと？とうとう頭のネジ五本位抜けたのか…、そんな嘘で騙されるほど俺は鈍くないぜと言う意味を込めてポンポンと肩をたたくと、男は悪魔のような微笑みを返す

「ほら、念願書だよ、早くいかないと神様怒るよ？」

チラチラと見せつけるのは正真正銘の念願書、ついでもう受付済みギャースこの馬鹿野郎悪魔、そう叫びたいが一応こいつも上司、言いたくてもいえねえ

「めっさ口に出してますよー、ヴィル君」

頭に手を置かれ、信じられない力で握られる

マジ死ぬマジ死ぬー何こいつ細身の癖して馬鹿力って！！バタバタと暴れていると、いつの間にやら空を飛行中

「あ、手離してほしい？」

また来たよ悪魔スマイル、お願いです離さないで下さい南無阿弥陀  
亜南無阿弥陀

ポイと投げ入れられたのは綺麗な大理石の床が続く建物、神殿だ  
任務あるからじゃーねとさっさと飛んでいく上司、俺を送ってくれ  
たんだ、優しいじゃんそう思っで少し感心していると、自分のズボ  
ンのポケットからはみ出している紙に気づくあー何だろう嫌な予感  
紙を広げてそこに書いてある字を読むと、こんにゃろうふざけやが  
つてと言う感想しか出てこない

『お前が遅れたりすると俺の評価が下がるんだよ、これからは俺の  
弟子らしく気品のある言葉使いとかに気を付けろや、わざわざ優し  
く送ってやったんだから感謝しとけ』

何この命令口調？まあ師匠だから当たり前だけど……

もうちょつと言いつてもんがあんだろうよと愚痴愚痴言っている  
と、使いのゴーレムが来る

「神がお待ちです、遅いですよ死神ナンバー168ヴィル・ウィン」  
溜息と一緒にでたような台詞、これだから此処の世界の住民は嫌い  
なんだよ、上からものがあるいいやつて

「へーい、了解しました」

態と行儀悪く接すると、そのゴーレムはやっぱり死神って下級だね  
えと呟く、オイコラ殴って良いですか？

何もない大きな広場に通され、暫くすると声が聞こえた

まあ簡単に言うテレパシーみたいなもので、任務内容を聞かされた  
単純に言うつと、これから俺の知人の過去を見てきてほしいらしい、  
んなもん自分で行けば良いのに……

「では、お願いします」

はい、と短い返事をして、目を瞑る

体が地面に吸い込まれ、少しずつ分解されていく

そして大きな狭間に吸い込まれる  
全てが吸い込まれ、目を開けると異世界が広がっていた

燦々と降り積もる灰色の雪と見知らぬ家々

その中の一つの大きな赤い家

そこに、見慣れた色合いの髪を持つ少年が居た

血だらけで、所々酷い怪我をしている、まだ新しいものらしく、ジ  
ワと服に滲んだ赤は鮮やかだ

「今日の報酬です、160万ドリル」

担いでいた大きな袋を門前に居た男に渡し、心配そうに返事をまっ  
ている

「ふーん、結構安かったんだね……三日も掛かって刈った化け物な  
のに」

当たり前のように少年の金を受け取り、不満を言う

160万と言う大金を安いと言うこの男は、ブクブクに太っていて  
ブタのようだ

それに比べ少年は痩せ細っていて、肉が殆どない

この男が少年のような生活をしたら、すぐに死んでしまっただろうな

「……………すみません、今度はもっと大金を持ってきます」

怯えながら誤り、立ち去ろうとする少年を待てとブタ男が捕まえる  
そしていきなり、思いっきり殴った

少年の体は大きく飛び、強く地面に叩き付けられる

ツウーと、少年のこめかみに血が伝う

「よくそんな弱っちい体で賞金稼ぎなんて出来るよな、化け物ども  
の対したことないんだな」

吐きすれるように言っ、男はそのまま大金を手にかへる

これは、虐待と言う行為ではないだろうか

でももしこれが虐待だったら、これほど非道い虐待は無いだろう  
子供に危ない仕事をさせて大金を稼がせ、そして殴る

人間は、これほどまでに汚い姿になれるんだと、初めて知った

「ゲホゲホッ……痛っ………」

数分後、男が完全に立ち去った事を確認し、少年はヨロヨロと立ち上がる

こめかみを流れる血はどんどん酷いものになり、次第に血まで吐き出す

「お、おい大丈夫か？」

思わず駆け寄ると、少年は驚いたようだ、体を強ばらせて仰け反る

赤い目

少年が初めてこちらをみて、此方も驚いた

この少年は、多分自分の師匠だ

髪の色も目の色も同じ、顔立ちもあの顔を子供にするとこんな感じになっていただろう

にしても可愛い顔だ、コレがアレだとは信じがたい……

「お兄さん誰？」

そう言われ、改めて少年の存在を思い出す、それにしても師匠にお兄さんで……

やはり大人バージョンと子供バージョンの大きなギャップに驚く

「えーと、通りすがりの旅人。君、酷い怪我だけど大丈夫？」

こういうのはみっちり師匠に教え込まれたから心配はない

俺の説明に納得したのか、質問へと思考を走らせる少年

「大丈夫です、それにしてもこんなご時世に旅とは珍しいですね」

ニツコリ微笑まれ、逆に質問される、まさかこう返されるとは……

それよりこんなご時世って？

「ああ、ちよつと大切な目的があつてね」

勿論答えも教えられているから大丈夫、だがこう聞いてくる奴はかなり手強いと聞いた

「そうなんですか、では俺はこれで失礼します」

さつさと切り上げて立ち去る少年、こんなところはそっくりだ  
まあ今はそんな悠長に語ってる場合じゃない、少年の手を掴み止め  
ると、怪訝そうな顔をされる

あ、こんなところもそっくり

「ご、ごめーん、俺今日宿探してるんだけど、泊めてくれない？」

ああ、俺だったらこんな強引な旅人いたら殴るぜ

だがどうやらこの少年は違ったらしい、少しため息を付き、付いて  
きてくださいと言った

やっぱりあの大きな家に入るのかなと思ったが、そうでは無かった  
あそこから暫く歩き、薄暗い路地裏に入ってそこにある小さな家に  
入った

着いた灰色の小さな家には、小さな電気とソファーと毛布、そして  
水道と窓だけの殺風景な部屋が一つと狭い書斎が一つ

「悪いけど此処で寝てください」

そう言われソファーを見せられる、見たところこの少年が普段寝る  
場所も此処らしいのだが

「良いよ俺は、屋根と毛布があれば十分」

やんわり断ると、追い出しますよ？と脅された

嫌なところは同じだ

人の優しさなんだと思ってるんだこいつは……

「僕はまだ寝ません、食事は遅いですから」

ボタンと大きな音がしてドアが閉められる、そして俺は一人残された  
何か途轍もなく切ないんですけど、悲しいんですけど

やっぱり元からアレか、子供時代からひん曲がっているのかあの人は  
小さくため息を付いて頭を冷やすと、でも子供時代はまだまだ良い

方だなと思い直す

寝床もくれたし食事も用意してくれるっばいし

だが気になるのはやっぱり生活だ、男に殴られ、そして多分危険な仕事をしている

「何であの馬鹿強くてプライドの高い師匠があんなブタに黙って殴られてるんだろう」

少なくとも自分の知っている人は、殴られたらその三倍返す様な悪魔だ

その悪魔も子供時代は少しは大人しかったようだが、やはり俺が殴ったら二倍にして返すだろうと推定される

そしてこの人生の終わりはもう近い

俺は見習いでも一応大体の死神の能力は会得している  
だから直感で分かる、命の終わりが

死神と成る者は大きな罪を犯した者だ

お前はどんな罪を犯した、死滅への道を辿る者ヴィル・ウィン

俺の犯した罪は自殺だった

話によれば、俺は元々その次元に居るべき存在じゃなかった  
つまり、異質な存在だ

姿形は同じでも、そこに在るべきものではないもの  
いずれ体は異質の魂を支えきれなくなり、壊れる

俺の場合は、先に壊れたのは体ではなく精神だった

俺は死んで、体という枷から解かれた

そして俺は大きな風の塊となって、人を殺した  
無意識に、ただ悲しみという感情のままに

異質の魂は世界にとっては驚異だ

俺が腕を一回振るえば竜巻が起きて人を襲う

俺が少し地面を殴れば地震が起きる



俺はあるとき、化け物だった  
それを助けてくれたのが、師匠だ  
師匠は俺を死者の国に連れて行き、助けた  
本当は大罪を犯した罪で永遠の苦しみを味わう筈だった俺を  
自分の監視の元、死滅までの全てをとみに生き、そして異質の魂を  
刈ると契約の元で

師匠の罪は何だったのか？

何故俺を助けたのか？

それにこの記憶は深く関わっている気がする

見たところ師匠の魂もここでは異質なものらしいが、自殺しそうに  
は見えない

では何故死ぬ？何の罪を犯したんだ？

「おいソウル」

大きな野太い声が聞こえた

ソウル、多分それは師匠の前の名前だろう

「ギル？何か用」

短い返事をして出ていくソウル

この様子だとソウルと野太い声の男は知り合いだろう  
良い方の

ドカドカと上がってきたのは声の通り大柄で目つきの悪い熊のよう  
な男

うつわー！このツーショットまったく似合わねえー！！

「ん？何だこいつ、ソウルの知り合いか？」

「ああ、こいつね、怪しい旅人だよ」

怪しいって、こいつ俺のこと絶対信用してねえ

ふーんとつまらなそうに言う熊男

「で、何のようなの？ギル」

さつさと言つてよと促すソウル、その姿は年齢相応だった

「実はまた依頼が入ったんだ、レディとアルフ両方に」

またかと嫌そうに溜息をつき波面すると、ギルが苦笑する

「でっかい竜五匹、あとその他多数」

そこでやつと話がわかった、これは金稼ぎの話だったんだ

そしてこのギルという男は相棒で、二人で依頼を受けているんだ

まったくこんな小さい子供にこんな危ない仕事させていたのかと改めて腹が立つ

「ふーん、あ、ちょっと外して」

そう言われ、俺は部屋を追い出された

そして話が終わる夜中まで、俺は一人悲しく一人で待っていた

「ごめんね、もう入ってきて良いよ」

ニツコリと上機嫌で微笑まれ、少し吃驚する

やはり知人との会話は楽しかったのだろうが、あの悪魔でもこんな風に笑えるのだ

改めて自分が信用されていないと気づき、少しガッカリする

やはりどんな人物でも師匠は師匠、恩人は恩人だ

それになぜか俺はあの人と居るのが気に入っているから、やはり好んでもらいたいものだ

朝日が差し込み、頬を照らす

「ねえヴィル」

自分が呼ばれ、何だと見てみると少年が一人

「……、お前何で俺の名前知っているだ」

そういうと、逆に驚かれる

「あんた本当にヴィルって名前なの？ヴィル・ウィン」

「そうだよ俺はヴィル・ウィンだ、どうして知っている？」

「ちよつと夢で似ている人いたから」

ああ『前触れ』か

こいつ、今日死ぬんだな

『前触れ』は異質の魂に起こる現象だ

俺も実際、見たことがあった

そして、その夢を見た日に自殺した

随分短い間だったがこのチビ師匠には世話になった

それが今日で死ぬとわかると少し辛い

「夢の中で、俺とあんたは仲間で死神だった」

「そうか」

「俺はあんたを助けたんだ、あんたは化け物だった」

「……」

「悲しい、化け物だった」

「……そうか」

「俺は何だかすごく悲しかったんだ」

「……？」

「すごく悲しくて、悲しくて、助けたくて仕方なかった」

「」

「俺はあんたを助けられた？」

「ああ」

まるで師匠の本当の気持ちを聞けたような感じだった

師匠が俺のこと、すごく大切の思っているようで、嬉しかった

「……ごめん、俺変だ」

顔を俯けている小さな少年、俺の師匠

「別に良いよ、俺は嬉しかったから」

そういつて優しく頭を撫でてやると、遠慮がちに抱きつく

この小さい子供の命は、もう僅かだ

「俺さ、拾われたんだ、あの家の人に」

「うん」

「俺の姿はね、おかしいんだって、この世界では」

「うん」

「俺ね、昔から腕っ節だけは強かったんだ」

「うん」

「だから賞金稼ぎしてて、毎日毎日怖いんだ」

「うん」

「いつか、死ぬんじゃないかって、思う」

「うん」

「だんだん増えてく罵りの声が怖い」

「うん」

「だんだん無くなってく、優しい声が怖い」

「うん」

「いつか俺の周りの全員が俺よりずっと遠くの所へ行って」

「うん」

「いつか、俺の周りの全員が居なくなる気がするんだ」

「うん」

「毎日殴られて殴られて、罵られて罵られて」

「うん」

「毎日毎日ずっと恐怖が続く」

「うん」

「最近よく見るんだ、独りぼっちで暗い暗い深い所にいる夢」

「うん」

「誰も居なくて、光さえなくて、ずっと一人ぼっちの夢」

「うん」

「怖いよ」

「ああ」

「すごく、怖い」

「そっだよ、なあ」

それは俺が知る中で一番の恐怖

一人は怖いよ

死なせたくない、そう思った

こんなに辛いことばかりで

小さくて、他の何にもやらない奴らが生きて、何でこいつみたいに  
生きたい奴が生きられないんだ

何で、こいつは死ぬんだよ

何でこいつはこんなに不幸なんだよ

何で、こいつは……

腕の中で小さく泣くこの子供が

何でこんなに過酷な運命を背負わなきゃいけないんだよ

「行つて来ます」

「うん」

「ありがとう、嬉しかった」

「そうか」

「もし俺が生きて戻ってこれたら、また俺の愚痴聞いてね」

「……ああ」

「俺が死ぬときは　あんならわかるよね」

そう最後に微笑んで、光の中へ姿を消した

あいつが死ぬときは

数時間後、俺はこの世界をたった

それは何を意味するか

暗い中、一人の子供が蹲る

真っ赤な血と大きな怪我

そして最後に仲間の死体

白い髪の子供立ち上がる

最後の一人の仲間の武器を掴む

「さようなら、大ッ嫌いな僕の世界」

ツウーと頬を伝うなま暖かい液体

静かに鎌を首にかけ、何の前触れも無く振り下ろす  
自由になった異質の魂は、悲しみの風を走らせる  
そして、静かに天に昇っていく

鎌を首振り下ろし、また一つ魂を刈る

「おい、どうかしたか？何故泣いている」

同僚の声

「え？」

驚いて目尻に手をやると暖かい液体

ああ、そうか

「ちょっと昔の事思い出しちゃって」

そう言くと、熊顔の人のいい同僚は苦笑する

「あんなモン、思い出すようなものじゃないだろ」

自分と同じ世界、少しの間同じ道を歩いた者



こいつが死神になっていた時は驚いた、彼も異質だったのかと

「確かにね、でも、少し、良い思い出もあるよ」

そう笑うと、へえどんなの？と聞かれた

「俺のことを理解してくれる怪しい旅人さんの思い出」

【外伝番】 記憶と繋がり（後書き）

連載はじめの投票がいきなり外伝版!!  
ここまで読んでくれた人に感謝します  
ついでにコメントくれたら泣いて喜びます

## 過去

「見たか？もうちょっとで世界一つぶっ壊しそうになったって化け物」

「見た見た、ありや地獄行き決定だな」

「だよな、スゲーぜ千年ぶりだつてよ？地獄行きは」

「マジかよ？！そんな化け物よく捕まえられたな」

「まあな、捕まえたのは、あのジエイドさんだつて」

## 【始まり】

高橋拓也、中学二年生、部活は帰宅部で成績は上の上、運動能力も上の上

異様なまでの才能を持ったこの少年は、現在は不登校だ

顔は悪くは無く、どちらかといえば良い方、それでこの才能となれば女子は寄って集る

それを妬む男子と学校に来ずとも成績の良いことを妬む教師十数名

目の前には大勢の人が歩く、そしてジッとそれを眺める俺

道行く人々はまるで俺が存在しないかのように全く速度をゆるめず機械的に歩く

時折チラリと俺を見る者も居るが、それも数秒、結局は他の者と変わらない

時々、俺は自分が何のために生まれたのか疑問に思う

ただ簡単な授業を聞くため？

それとも馬鹿な女子に騒がれる為？

答えは見つからず、ゆつくりとそして確実に月日は流れる

俺が死んでも良いか？と聞くと、決まって相手はこう答える

「駄目だよ、君はもつと生きなきゃ」

そして最後にこう付け加える

「親御さんも悲しむよ？」

よくこんな説得で自殺を本気で考えている人間を止められると思っ

ているなと逆に関心する

この質問に俺はこう答える

「親は、俺が小学二年生の時に死にました」

そういうと、相手は同情するかのように言う

「辛いのはわかるけど、親御さんも天国できつと君のことをみているよ」

まるで幼稚園生に言うかのような台詞だ

「俺の親は、俺を虐待してました、死んだのはそれぞれの不倫相手に殺されたからです」

そう言うのと、焦ったような素振りを見せる

「でも、君だって本当は生きたいでしょう?」

「全然」

はつきり即答してやると、今度は怒る

「君、私をおちよくって楽しい?嘘くさいことばかり言って、人の優しさをなんだと思っているんだ?」

嘘臭い、決まってそう言うて俺は追い出される

優しさなんて知らない、どうせ情けでやっているだけだから

どうせ自分に余裕があつて、自分がすごいと思っているからこんな  
カウンセリング何て仕事をするんだ

みんな自分では対応しきれない重荷があつたら、捨ててしまいたい  
と思うでしょ？

俺はただの重荷だ

学校へ行くと、まず冷たい視線が飛んでくる

そして小さな憧れの眼差し

まだ破棄されていない自分の席

それが今ではただ一つの居場所だと思う

鞆を置いて、イスに座り机に頬杖をつく

周りかはチラチラと色々な視線を感じる

妬み、憧れ、そして異質者を見る様な目

そこで俺は改めて自分が此処に居るべき存在じゃないんだと認識する

授業が始まり、つまらな担任の説明が耳に入る

時々ギロツと睨む様な嫌な目つきで俺を見ては、授業を続ける

まるで居てはいけない者のようだ

難しいらしいまあ簡単な問題を指され、暗算で答えを出す

答えをいつと舌打ちをするように正解だと言われた

それから授業は続き、そしていつの間にか下校の時間になる

部活へと慌ただしく走る生徒、生徒

自分と同じ年代の人間だとは思えない生き物たちだ

一人ゆっくり廊下を歩き、電車に乗り、アパートに着く

そして読書を始め、風呂に入り寝た

毎日毎日が退屈だ

つまらない、人と会いたくない

気がつくと、俺は真夜中の廃墟のビルに居た

冷たい風が俺の髪を揺らす

フェンスはもうボロボロで、所々穴があって入るのは簡単だった

足をかけてちょっと身を屈める

そして高いビルの縁に着く

後は、後一步踏み出せば良い

そして衝突時の一瞬の痛みに堪えれば、もう終わりだ

感情なんて元々なかったロボットのよう

俺はその一步、踏み出した

気がつくと真つ暗な世界に居た

感情が勝手に動き、そして俺は風を纏う



冷たい風は興奮した体を冷やしてくれた

俺は腕を力強く振り、大きな竜巻を起こした

自分の感情を乗せて

俺は廃墟のビルに居た

そこがいつも俺の休み場だから

汚い屋上と錆びてボロボロのフェンス

その世界が、気に入っていた

「おいその」

のんびりした声

まさか自分には無いだろうと思いつつも、振り返る

見えたのは美しい男

動きやすそうな黒を象徴とした服に、大きな鎌

「そーそーお前だよ、つーかもうこの世界にはお前以外殆ど居ない  
しな」

陽気に喋り出す男

正直戸惑った

話しかけられた事なんて、一回も無かったから

「お前、自分のしたことわかるよなあ？」

ドスのきいた声、低くて、さっきまでの喋り方とは全然違う、別人だ

すごい寒気が襲う

いつの間にか近くにいる男

動かない体

「わかるよな、お前は这个世界を壊したんだ」

睨まれ、思わず怯む

怖い

「これは大罪なんだよ」

「自殺、そして世界への干渉、つかこれは世界を破壊してっけど」

変わらない声の冷たさ

「お前は、罪を償わなきゃいけない」

「着いてこい」

嫌だ

直感的にそう思った

いやだ嫌だイヤだ

俺は激しく暴れた

竜巻、大風、炎、水

激しく抵抗するが、その攻撃は全てかわされる

グラッ

体が揺れ、景色が歪む

何だ……？

「力の使いすぎだ」

薄れゆく意識の中、最後に見たのは男の悲しそうな顔だった

ブチッ

目を開けるとぼやけた灰色の空が見えた

体を起こそうとすると激しい頭痛が襲う

「っ………」

「起きたか」

背後から声をかけられた

そして視界にあの男の顔が写る

逃げようと起きあがろうとするが、手が動かない

「悪いな、ちょっと縛らせてもらった、暴れられるのは困るんでな」

男は苦笑しながらそう言い、自分の隣に腰を下ろす

「まあ何だ？ ゆっくり話そうじゃないか」

お前も、理由が分からないまま辛い目に遭うのは嫌だろう

そう呟き、そうだろう？とでも言うようにこちらを見る

少しその動言に戸惑ったが、知らんぷりをして落ち着く

こういう風に話しかけられるのは初めてだったから

男は俺が大人しくなったのを確認して満足そうに微笑む

「まずお前についての説明をしようか」

訪ねる文だろうがこの言い方とこの男の性格を考えると「結構だ」と断っても気にせず続けるだろうから俺は軽くうなずくだけにした



予想通り男は俺に目もくれず勝手に喋り出した

「これから俺が話す話はお前の知識じゃあ到底かなわないものだ、あまり深く考えずにただ変なオッサンの空想話を聞くようにして聞け」

どうせ今度も反応してもしなくても変わらないだろうと思っていたが驚いたことに男は俺を見つめていた

慌てて頷くと少し苦笑された

男は側に置いていた大鎌の刃に軽く自分の指を滑らせる

すると指は切れ、血が流れた

男はそれを確認させ、立ち上がり大鎌で俺を切った

「目、開けても大丈夫だ」

咄嗟に堅く閉じた瞼のことを指摘され、パニック状態から戻る

目を開けてまず感じた違和感は痛みが無い事

「わ」

鎌が振り下ろされた首を見ると、思わず上げてしまった間拔けた声

鎌は確かに俺の首を通っている

だが、切れてはいない

今も俺の首に刺さっている

鎌が実際に触っている部分はまるで水のようにタプタプと揺れていた

「お前昔から怪我の治り早かっただろ」

そういきなり指摘され、確かにそうだと思い出す

「ちなみに言うとな怪我自体変だったろ、想像したくもない様な大きな怪我を負う筈なのに何故か軽傷だったり、怪我している筈なのに何故かしていなかったり」

確かに、そうだった

「想像出来ないだろ、自分の首が大鎌で切られる何て所は」

実際には想像したくないんだけど……、と小声で付け足すし鎌を俺の首から引く

「怪我をする、と言うことはその世界に干渉していることでもあるんだよ、だからこの世界に干渉できない俺達には本物の怪我が出来ない」

「じゃあ俺のする怪我って何だ？」

「実はその答えは今のお前とさっきの俺の言葉にある……、めんどー何で教えるが『想像』だ」

頬杖をつき男は面倒臭そうに言う

「お前の今までの怪我は全て大雑把に言えば“幻”、お前が想像した怪我だったんだ」

「ついでに言うとお前も大雑把に言うと“幻”だ」

「感じなかったか？ 生きている時、自分が“あまりにこの世界で浮いている”と」

「周りに、世界に“適応”できない自分、存在しているのに存在していないと同じ」

「幻じゃなく、存在したいと思っただろ、お前」

「体はいわば幻をかける術者」

「その術者を殺せば存在できる」

「自殺は唯一術者だけを殺せる方法なんだ」

「幻は解け、お前は存在した」

「だが幻でなければいけない言うことは、俺達がこの世界に存在してはいけないということなんだ」

「だから大罪なんだ、自殺という行為は、存在してはいけないものが存在してしまうから」

悲しい目

それは今まで見てきた同情の目じゃない

自分が悲しい時の目だ

本当に初めてだ

こんなに『優しく』されるのは

こんなに自分が『辛かった』って思い知らされるのは

「俺は、どうして“幻”なんだよ？」

情けない

子供の様な小さくて弱々しい声だ

「この世界に居るべきではない魂、いわば異形の魂を持った者だから」

魂

ああ、だから

だから、俺が異形のモノだから、この世界は優しくなかつたんだ



居てはいけないものだから

みんな冷たかった、みんなと打ち解けられなかったんだ

でも

「別に好きで異形のモノになった訳じゃない、よな」

言いたかった言葉を、先に言われた

勿論言ったのは目の前の男だった

「好きでこの魂持つてる訳でもない、好きで此処に生まれた訳でもない」

「好きでなった訳じゃないんだから、優しくしてくれてもいいじゃないか、って」

「そう、思っちゃまうよなあ……」

へらっと、綺麗に咲いた困ったような笑顔

笑っているけど悲しそうな、見ている方が悲しくなる様な笑顔

目尻が焼けるように熱くなった

多分初めての涙

生きている内には流せられなかった涙

ああ、辛い

この人も辛かったんだろうなあ、きっと

すごく辛くて悲しくて惨めでしょうがなくて

我慢できない位辛くて

それで死んじゃったんだろうなあ

何となく、この人も俺と同じなんだと思った

良かった

「あなたには失礼かもしれないけど……良かった……」

止めなく溢れる涙

その涙は、全然止まりそうにない

「一人じゃなくて……良かった……、他にも……遠くても……俺と同じ思いしてる人が居てよかった……」

ほんとつ、良かった

いつも思ってた

もしかして、この世界の中でこんなに辛い思いをしているのは俺だけじゃないかって

そう思う自分が、辛くて、嫌いだった

子供の頃見てた教育番組のアニメ、そこには色々な辛い思いをしている子達が居た

それでもその子達は、ちゃんと胸を張って、みんなで生きていくんだ

そのアニメの子達が羨ましかった

ちゃんと同じ思いをしている子がいるから、その子達とちゃんと巡り会って、そして生きていたから

すごく幸せそうで、羨ましかった

俺にもいつか、そんな仲間ができるって信じてた

そんな仲間に出うために、頑張って生きようって思ってた

でも、頑張って生きて、誰も気付いてくれない

何故か、どんなに頑張っても、もっと深い闇の中へ落ちていくって気がした

頑張って頑張って、生きて生きて、落ちて落ちて

限界が来るまで、生きてきた

限界がくる前に、仲間と会えるって信じてた

そしてきっと、仲間が俺を闇から救ってくれるって信じてた

でも、仲間と会う前に、限界が来た

ああ

「生きている間に、あなたに会いたかった」

ブウオン

大きな風が吹く

さっきと同じように、急に眩暈がした

「お前っ………何で………!!」

ぼやけた視界に、黒い死神が見えた

体が重い

頭が痛い



此処は何処だ？

「起きろ」

言われなくても起きてるよ

そう言い返したかったが、声が出なかった

はやくしろ、大声で怒鳴られた拳げ句頭を蹴られた

痛い

無理矢理体を立たせられ、グラリと全身が傾く

やっと見えてきた映像が、逆に頭を混乱させた

「……此处、何処だ……!!」

手足に重い鎖

両側には知らない大人の男性

まるで裁判をするような部屋に居た

「此处で、お前は裁かれる、まあ多分地獄行きだけだな」

小さに嘲笑う様な口調で言う左側の男

右側の男は、深くマントを被っているので顔が見えない

引きずられるように前に歩き出す

着いた先には何千人もの人々が居た

その中の中心に居る人物達が、俺に話しかける

「貴方は昨日、死神ナンバー27ジェイド・ウィンクスによって捕獲されました」

ちなみにジェイドってのは俺ね、と左側の男が言う

「自殺、そして世界への干渉、この二つが貴方の罪です」

ああ、言ってたなあの人

そう思っていると、またジェイドという男が話しかけてくる

「あれはもう破壊だったけどなあ、ギリギリでシドの奴が止めたから干渉ってだけになったんだぜ？良かったなあ」

シド？止めた？

あの人シグって言うのか……

「シグって人、どうして」五月蠅い、少しは黙ってる」

俺の質問を遮ったのは右側の男だった

「五月蠅いだって、相変わらず堅いねえもうちょっと気楽に」お前もだ、場所くらいわきまえろよ、馬鹿」

なんだよ連れねえなあと、小さく呟き、左側の男は黙る

右側の男はその声を無視して変わらず前を見ている

この人、あの人に似てる……

「ちゃんと話位聞け」

また右側の人の注意が入る

心の中ではーいと返事をして、改めて正面に向き直る

「結論として、この者を『地獄』へ連れて行くと決まりました」

随分話し飛んだな……

呆れたように言ったジェイドの言葉に同意しながらも、内心かなれ焦った

「すみません、もう一度検討してもらえませんか」

言いたかった言葉を言ったのは右側の男の人、やっぱり似てる

少しざわついた人達を全く気にせず、右側の男の人は続ける

「だが、この者は大罪を犯した、今までにないくらい大きな」

そう言われそうか、俺はそんなに酷いことをしたのかと、今更ながら後悔した

「俺は一億の魂を刈りました、確か朝廷の決まりで一億の魂を再生させた者には一つだけ願いを聞くという決まりがありましたよね？」

「確かにあつたな、よく知ってる」

不思議な空気だった、誰一人、口を利かない

「どーも、じゃあ俺の願いを聞いてください、此奴を無罪放免にしてください、俺がこいつを監視します、期間は、こいつが死滅する瞬間まで」

「おまえ何言ってるんだッッ!!」

「何って、俺がこいつ死ぬまでずっと見てやるから地獄に行かせるなって言ってるんだよ」

「それは分かってる！！どうしてお前がそんな事するんだよッ！！」

「こいつ気に入ったから」

猛烈な勢いで喧嘩し始めた二人、騒がしくなる人々

「……まあ、あなたの頼みでしたら良いでしょう、ではその子、よろしく願います」

ええーっ！っ！

俺の右側に居た人以外、みんなそう言った

勿論おれもだ

こんなに簡単に地獄行き訂正されるのかよ……？

「来い」

終わった途端に手を引っ張られ、その部屋から出された

勿論ひっぱったのは右側にいた人だ

後ろでジェインの騒ぎ声が聞こえたが、あえて無視した



「まあ、つー訳でお前は俺の部下になった」

唐突な切り出しだなと呆れるが、不思議と笑いが込み上げてくる

「あんた誰ですか？」

「は？」

「だから誰ですか？」

前語撤回、俺も唐突だ

「あー俺だよ」

さっきまでとは打って変わって優しいと言っか気楽な口調になった

そして深く被っていたマントを脱ぐ

「覚えてるよな」

「勿論」

現れたのは青灰色に似た髪の毛と赤い目

あの人だ

「はい、じゃあこれからよろしく、俺はシグ・ウィンだ」

自然と零れた笑みに、また笑う

「よろしくお願いします」

オマケ

「あーこれでやつと心置きなく殴れる、テメエよくも俺のことオッサンって言ったなっ！！！」

「いっで！！ってあれはアンタが自分で変なオッサンって言ったんじゃないかッ！！」

「あれはジョークだジョークっ！！それくらい分かれ馬鹿！！」

「わかんねえよ、普通にあのタイミングで冗談とかなないから!!」  
「かあんた性格変わりすぎ!!」

「ケツ!!これが本性だ、何だ優しいとでも思ったか!!!!」

「うつわー最悪だこいつ!!!!」

## 過去（後書き）

すみません、最後ぶっ飛んでしまっ

ほんとすみません！！本当はもっと感動だったんです！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3917d/>

---

死神

2011年1月12日03時58分発行